

小田原史談

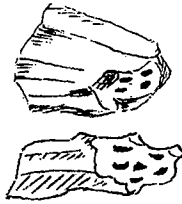
第87号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

酒匂石器土器収集報告及び 古代の酒匂考察

③骨化石

昭和四十七年六月私の家の裏の道路の排水工事中現場(旧地名酒匂町字北中宿)にて一個の骨化石を採



集した、この骨片長さ三厘径二・五厘×二厘のほぼ四角形にて中に「ハス」の穴の如く五条の穴が明いている穴の大ききわ偏平で六×三厘×二厘で人骨や一般の動物の骨と異なった化石である。この地区は約一・八米まで赤土でそれ以下は粘土砂層で地下約三米の地点より出土した、この地区も

約八十種より下方は石岩等皆無でこの骨化石一個のみ出土した、他に類似品及び関連ありそうな資料の発見に務めたがそれらしきものも発見出来なかった。

三、土器片収集

私の家の庭より出土する土器破片が他の地区からの混入かどうか、家敷三ヶ所を選定し試掘して見た、家敷の東方・北方面よりは何

も出土しなかったが、南面(防空壕跡より約五米北に離れた地点)からは出土した(出土状況図3) 二米×一米×深さ二・四米立方体を試掘しその結果陶器片三個、土器破片十數個を發掘した、その中に直徑三・五厘、厚さ二厘の円盤形の土器で中央に経七耗の丸い穴の明いている特種な土器を發掘した、何であるか不明であるが、装身具

図3 (試掘)

深さ	地層	備考
		埴土
0.5	〇〇〇	陶器片
1.1	+	
1.4	斜線	土器少量
1.8	斜線	土器多量
2.1	斜線	土器少量
2.1	斜線	土器少量

番号	地区	数量	備考
1	字北中宿川瀬速雄宅南庭	多量	私の家の庭(試掘した)
2	内田孝宅東駐車場	〃	私の家の前の南側一帯
3	二見吉衛持分畑	〃	〃 西側一帯
4	石塚義雄持分畑	少量	上鞆寺西側二基の五輪塔附近
5	上鞆寺銀杏樹附近	〃	布目瓦二個含む
6	大見寺東側路地	〃	〃 二個含む
7	原度器工場北側畑	〃	旧中鞆寺跡裏手
8	字川端南本典寺南側	〃	元菊川河尻の湾曲部高師小僧併出
9	字川端北酒匂神社入口 諏訪社	〃	悪水堀河さらいの土砂中より
10	字十二天雷電社東及北一帯	多量	旧下鞆寺跡より旧十二天塚跡一帯
11	字祝免本多三郎持分畑	少量	祝免北側字焼畑附近よりも少量出る

か祭器具の様である。陶器は地下八十種と一番上層部より出土した須恵器の破片と思う。

(2) 弥生式土器片(宮ノ台)

(塚の切込み・三角形区切斜線模様)

(3) 古墳時代土器片(鬼高式)

(刷毛目模様・朱尼・肉厚)

(4) 弥生式土器片(杯・高杯)

(刷毛目模様肉厚)

その他壺皿瓶鉢等の破片

に以ており、肉も厚いもの

うすいもの、色も赤味の濃

いもの茶色があったもの

等多種多様である。

しかし総体的に古墳時代

のものと思われるものが大

部分で、弥生式らしきもの

四分の程度、縄文式らし

きもの数点の少量の様であ

る。

なお比較参考用に左の地

区よりも土器片を採集した

1 小八幡神社境内

2 小八幡旧字一丁田浅見

氏持分植木畑

3 千代台地(布目瓦片含

む)

これ等地区的土器片も酒

匂地区の土器片と同質の様

である。

また浅見氏の好意により

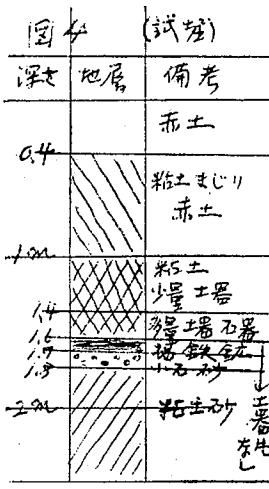
小八幡字一丁田の同氏持分

植木畑の中を直径一・五米

×深さ二・二米試掘し土器

破片及び石器類を採集した(出土状況図4) この一丁田は旧小八幡部落の跡と云われ(森戸植木畑)小八幡神社)を結ぶ南北の線上に当り、高田府中説の五条通りに当る地点で、試掘状況から判断するに地下一・六〜一・七米地

点に褐鉄鉱層がありここが川又は沼地の底である(褐鉄鉱層及び高師小僧の出土状況より見て) 附近の川辺又は沼辺に人が住んでいた遺品と思ふ、土器片は酒匂地区出土の土器片とてい



●一・四一・六米地点にて凹石1、打石1、石棒1、石刃1、こぶし大の石3、小石十数個出土せり
●一・六一・七米地点にて高師小僧出土した。

高師小僧とは愛知県豊橋市高師原より多く出土する管状・樹枝状の褐鉄鉱の固まりで、その形が幼児、鳥、魚等を想像させるためこの名がある。

湖沼や湿地に住むバクテリアが水中に溶けている鉄分を酸化して褐鉄鉱に変化させ木や草の根の表面に積み重なって出来るとされている。管状のものを鈴石とも云い糸を通して鈴の代用にしたという。

四、石器類収集

土器の収集と合わせて石器類の収集も行なった。但し明らかにわかる五輪塔、

(弥生・古墳時代のもの様である) 又この試掘にて石器類の同時出土は酒匂地区古代の考察に重要な示唆をなす成果であった。

宝篋印塔の部分石や基礎石、石柱、姿像を除き凹石、打石、磨石類を主に採集し十数個の凹石と数個の磨石を収集、又現存を確認した。凹石は大別して二系列あり、一つは、基礎石や橋石像石等に数ヶ所も打凹のある玄武石、これは日本の各地で散見する。祭祀の名残りか子供達が草木より染料を作るに草木を叩いたものであり、今一つ私の収集対象にした凹石は大きさが十種〜三十種程の磨擦面の多い多穴性の火山石に打凹のあるもので他地区ではあまり見掛けないものである。近世のものか古代のものか

の目的に使われたものか不明なるも前記小八幡一丁田浅見氏植木畑の試掘にて同種類の凹石が土器片及び磨打石器と同時出土しており、酒匂地区の土器片出土地区と凹石出土地区が重複しているの、古代生活に何か関連あるものではないか。思うに古代人が木の実などを割り又はつぶすのに、そこらにある石を手軽に使用した名残りかと思ふ。又磨石、加工石も凹石や土器片の出土地区と重複しており、凹石や土器と何らかの関連あるものだろうと思ひ採集した。

① 採集した凹石(分布図参照)

番号	収集場所	凹石の大きさ(cm)	凹部の大きさ(cm)	備考
1	北中宿川瀬速雄宅庭	27 × 24 × 13	縦×横×深さ 9 × 5 × 2	私の家敷土器併出
2	南中宿大木象山宅前路上	11 × 14 × 10	縦×横×深さ 6.5 × 6.5 × 1.5	旧南蔵寺跡
3	北中宿川瀬光雄宅裏	10.5 × 10.5 × 10	縦×横×深さ 5 × 5 × 1.5	磨石併出
4	〃	14 × 9 × 5	縦×横×深さ 5 × 4 × 0.8	磨石・布目瓦・土器併出
5	〃 大見寺東路地	15 × 10 × 7	縦×横×深さ 4.5 × 4 × 0.8	磨石・布目瓦・土器併出
6	〃 小島ツタ宅庭	22 × 17 × 6	縦×横×深さ 5 × 3.5 × 2.5	佐々木塚東
7	南中宿川中村ファミ宅前空地	11 × 9 × 4.5	縦×横×深さ 4.5 × 4.5 × 2	旧南蔵寺跡・磨石併出
8	〃 松川園北明治天皇行幸碑前	11 × 9.5 × 2	縦×横×深さ 6.5 × 1 × 2.5	旧家鈴木新左衛門家敷跡
9	川端北法船寺裏路上	7 × 5.5 × 4.5	縦×横×深さ 2.5 × 2.2 × 0.5	悪水堀川畔磨石併出
10	南中宿下田光男北畑	5 × 6.5 × 3	縦×横×深さ 3 × 2.5 × 0.8	磨石併出
11	川端北酒匂神社入口諏訪社	9.5 × 7 × 4	縦×横×深さ 4 × 4.5 × 1.5	悪水堀河さらい土砂中土器併出
12	川端南大塚均宅東畑	11 × 10 × 4	縦×横×深さ 5 × 5 × 1.8	旧家鈴木新左衛門家敷跡裏
13	北中宿石塚義雄宅裏	10.5 × 10 × 7	縦×横×深さ 5.5 × 6 × 2.7	坂田金時山姥伝説の旧家
14	〃 林宅裏	12 × 7 × 5	縦×横×深さ 5 × 5 × 2	上輩寺入口磨石併出
15	北中宿川瀬岩次郎宅裏	13 × 10 × 4.5	縦×横×深さ 5 × 5 × 1.8	県会議員川瀬先生宅
16	十二天渡辺道夫宅裏	15 × 10 × 5	縦×横×深さ 5 × 5 × 1.5	旧十二天塚跡南
A	小八幡一丁田浅見氏植木畑	16 × 11 × 7	縦×横×深さ 5.5 × 9 × 1.5	試掘にて土器石器併出
B	小田原市成田中堀の路上	14 × 11 × 7.5	縦×横×深さ 5.5 × 5 × 1.2	大見寺境内二個 上輩寺境内二個 この布目瓦片は千代台地で収集した布目瓦の中の繩

で凹部が径五種前後深さ二種前後である。

五、布目瓦片採集

土器、石器具採集中布目瓦の破片を採集した。

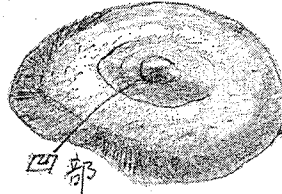
◎凹石確認(分布図参照)

番号	出土場所	備考
1	南中宿桑形宅	同家庭石
2	川端北鈴木秀雄宅	同家庭の敷石
3	川端南小島忠吉宅	同家庭入口の置石
4	妙善寺入口和田宅 東路上	川瀬春雄氏収集保管
5	石田貞宅西悪水堀	同家新築の折地下 六十種より出土
6	川瀬春雄宅	同家新築の折地下 六十種より出土
7	酒匂川河口附近(海岸)	飯田数義氏収集保管

目文瓦と似ているが、瓦の肉厚が異い色も異う。
又大見寺には立木先生が大見寺境内で採集された布目瓦三個が保管されている私の採集した瓦と布目、色調は同じである。

千代台地と酒匂出土の瓦はどうやら別種の様である別種とすればどちらが古いのか、いづれにしても、千代院寺と同時代もしくはそれ以前に瓦を使用した立派な建造物が酒匂にあったのではなからうか。
なお酒匂の古名にある瓦家敷、この周辺に散在する

採集場所	色調	瓦の肉厚 cm	備考
千代台地	黒色	2.7	布目印文(大模様)1
大見寺保管	褐色	2.0	(小模様)1 縹目文1
採集	褐色	2.0	縹目文2
上置寺	褐色	1.5	縹目文1 縹目文2



瓦片を調査したが、小田原城内及び早川一夜城跡に散在する瓦と同じ様な近世の瓦で布目瓦等古代の瓦は発見出来なかつた。
瓦家敷は河原屋敷とも云われ鎌倉時代の浜御所の一

◎凹石確認(分布図参照)

番号	採集場所	形別	大きさ	備考
1	北中宿川瀬速雄宅	凹石	11x7x2	半分程度
2	川端北鈴木秀雄宅	凹石	8x5x1	
3	大見寺東路地	凹石	14x5x3.5	
4	南中宿中村三宅東	凹石	8x5x4	
5	下田十右衛門宅	凹石	5.5x1	
6	川端本使手裏	凹石	7x5.5	
7	川端北法船手裏	凹石	11x5.5	
8	北中宿林宅裏	凹石	10x7x6.5	
9	小八幡神社境内	凹石	11x9x2.5	
10	小八幡一丁目浅見氏植木堀	凹石	13x9x4	
11	小八幡一丁目浅見氏植木堀	凹石	13x9x4	
12	小八幡一丁目浅見氏植木堀	凹石	13x9x4	
13	小八幡一丁目浅見氏植木堀	凹石	13x9x4	
14	小八幡一丁目浅見氏植木堀	凹石	13x9x4	

角で、ある瓦を焼いたと云う確証はないが附近より近世の瓦片多数散在する。
少量ではあれど布目瓦の発見収集は酒匂の古代研究の重要な資料と思う。

六、酒匂の古代考察

土器及び石器類の出土分布図並びに子供の頃を思い出して昭和初期の地形図を作成して見ました。
遺跡物は酒匂の高台に集中して出土している、この高台が酒匂の中心部で、この高台に古代より人が住んでいたのではなからうか、そして曾我氏や大友氏に先がけて豪族酒匂氏が住み栄えたのではなからうか。
私は古代酒匂を次の様に分類考察して見ました。

- 1 山岳地帯より原住民移住
- 2 海洋より文化人移住
- 3 初期相模国府庁酒匂説
- ① 山岳地帯より原住民移住
今より五千年〜三千年昔の石器縄文時代地球は最温暖期で海岸線は、久野〜足柄〜山北〜大井〜曾我〜國府津の山岳地帯でこの海岸沿いに人々は生活していたこの地区は衆知の通り堅穴住居、敷石住居跡や石器土器の出土する相模西部の原住民遺跡の宝庫である。約二千年前の弥生後期海岸線が低下し、これに伴って人々も狩猟と農耕地を求め移動した。
- ② 久野舟原二重遺跡や星山の住民は、多古芦子方面へ山北皆瀬川、足柄矢倉沢方面の住民は、松田塚原へ

- 曾我城前寺、國府津山住人は、小八幡前川方面へ大井山田家敷金子台の人々は曾我小海・千代・中里へ、更に南下して酒匂へと酒匂は大河の河口で堆積土壌なれば格好の移住先であらう。曾我精神病院附近中里大同毛織工場の遺跡調査に山岳地帯で出土する土器石器よりも新しい石器土器が農耕具と同時に発掘されるのは原住民移動を物語るものである。
- ③ 海洋より文化人移住
酒匂の地名の起源を新編相模風土記稿や皇国地史では、
1 日本武尊東征の折神酒を河にそ〜ぎし時の匂い説
2 河の流れ逆流説
3 地形彎曲、佐川田の曲

り部と云う地形説が記されており(3)の地形説ではないかと説明されております。
私はこの(3)説に加えて他地区よりの移住した民属の故郷名との複合された地名と解しました。
酒匂の「匂」は私の小学生の頃は「匂」と書き「匂」の古字は「匂」となり酒の古語は「キ」であります、即ち「キク」となる。酒匂川の古名はまり子川又は丸子川で酒匂の部洛の西、酒匂川との間を流れる河が菊川である、酒(キ)の匂(ク)を流れる河即ち菊川で、菊川は曾我大沢より発した仲々の大河であったが用水堰の掘鑿により現在の如き小河となった。
又まり子川は現在の河川より西方を大きく彎曲して流れ、用水堰開鑿頃と前後して酒匂川と云はれた様である。
更に推測すれば酒の「キ」は紀州の「キ」に通ずる、三世紀の頃武内宿禰が東国を巡察した。検分した良き土地に武内宿禰の本貫地(大和国高市郡宗我郷)から紀伊の人々を文化を携えて舟にて海岸線伝いに移住して来た。
古代の陸地はジャングルで通行は困難危険であった

海路は今と大差なく比較的
安全であったらう。海岸
添いに東へ東へと移住しそ
の一部が酒匂に上陸し住み
付いた、そして文化力を以
って原住民を制圧し首長格
となった。この首長を酒匂
氏と考えている。治安成つ
た豊かな土地を政府はその
ままにして置かない。武内
宿弥の孫にこの地の鎮めと
して宗我姓を与え派遣させ
た、宗我部比古命よく治国
しその任に応えた(宗我神
社・曾我氏の起源)以後大
友氏、弓削氏や物部氏の同
族穂積氏等陸統として大和
より来住した。

紀伊より東国移住は、千
葉房総半島と和歌山紀伊半
島の同地名多き事などで定
より来住した。
足柄平野の古墳が酒匂川
の左岸(東)で横穴式、右
岸(西)に高塚式の多いの
も酒匂より遠くなるに従う
古い古墳の形式が新しくなる
傾向にある。
(次谷につづく)

蟹を助けて

蛇の難を免れる話

額田 喜代春

昔、山城の國、久世の郡
に住む人の娘が、七歳の時
から観音品(カンノンボン
)というお経を教えられて
読み習っておりました。
そして毎月十八日の御命
日には、精進して観音様を
念じ、とうとう十二歳で法
華經一部を習い終ってしま
いました。

子供とはいいいながら、慈
悲心があつて憐れみ深く、
心ばえのやさしい娘であり
ました。
ある日家を出て遊び歩い
ているうちに、生きた蟹を
とらえて、ぶらぶら下げて
行く男に出合った。
「そのを蟹どうなさるの
ですか？」

ときいてみたところ
「持って帰って食べるん
だよ」と答え
そこで娘は
「それなら、その蟹をわ
たしにください。食べる
のだったら、わたしの家
に死んだ魚がたくさんあ
りますから、それを蟹の
代りにあげましょう。」
と言ったので、男も承知し
てその蟹を渡してくれまし
たので、娘はその蟹を河に
持って行って放してやりま
した。

一方その娘の年とつた父
親が田んぼに出ていると、
毒蛇が蛙を飲み込もうと蛙
のあとを追いかけて来まし
たので、老人は蛙を可哀し
そうに思つて、気がせくな
ら、蛙を捨てて藪の中に姿
を消してしまつた。
老人は、さて困つたこと
を言つてしまつたと思いな
がら家に帰つたが、この約
束のことが気がかりで食事
も喉を通らない。このあり
さまを見た妻と娘はそれに
気がついて
「どうしてお父さんは何
にもあがらずにそんな心

配そんな顔をしていらっ
しゃるの？」と聞いてみ
た。そこで父親は
「実はこういうことがあ
つた。つい慌てたはずみ
につまらぬことを約束し
てしまつた、それが気に
なつてならないのだ」と
答えたので、娘は
「そんなに御心配にはお
よびません。さあ/早く
御飯を召し上がつて下さ
い」と元氣をつけた。そ
こで父親も、娘の言葉に氣
を取りなおして食膳に向か
いました。
ところが、その夜の十時
頃になって、門をたたく人
があるのに父親は、てつき
りあの蛇がやつて来たもの
と気がついて、娘に相談す
ると
「あと三日経つてから来
るように頼んで下さい」と
と言つた。
そこで父親が門をあけてみ
ると、五位という立派な服
装をした男が立っていました。
「けさほどの約束に従つ
て参りました」と言うの
で父親が
「あと三日経つてから来
てください」と言います
と男は承知して戻つて行き
ました。
そのあとで娘は、厚い板
で周囲をしっかりと固めた
丈夫な倉のような建物を造

らせました。それから三日
目の夕方に娘はその倉の中
にはいり、戸をびつたりと
しめて、父親に
「今夜、あの男が来て門
をたたいたならすぐあけ
てやってください。わた
くしは一心に観音様の御
加護をお願いしましよ
う」と言い残して、その倉
の中に閉じこもつてしま
いました。
その夜の初夜(午後八時
)になると、この前の五位
の服装をした男が門をた
たたいたからすぐに開けた。五
位は中えはいつて、娘が倉
の中にこもっているのに氣
がつくと、やにわに恨みの
心を起こして、本体の蛇の
姿にかえり、倉をぐるぐる
巻きに取り囲んで尾でしき
りに戸をたたいていた。そ
れから夜中ごろになつて、
このたたく音がやみ、それ
とともに、蛇の悲鳴が聞こ
えた。その悲鳴もじきに聞
こえなくなり、夜が明けて
から見ると、大きな蟹を頭
にして、幾千幾万ともしれ
ぬ蟹が集まつて、この蛇を
刺し殺していた。
それからしばらくすると
蟹共はみな這い去つてい
つた。娘は倉をあけて出て来
ると、父の方に向つて言う
には
「わたしが一晚じゅう、
声をあげて観音品(カン
ノンボン)を読んでいた
ところ、美しいお坊
さんが現われて、わた
くしに
「けつして怖がつてはな
らぬ。ひたすらお経を読
んでくつ蛇腹喝氣毒烟火
燃念彼観音力(ガンジヤ
ギムフクカツカカン
ンカネンネンカナン
リキ)と念じていなさ
い」と教えてくださいま
した。
これはひとえに観音様の
御加護によつて、この難
を免かれたのでございま
す」
これを聞いて、父母は手
を合せて喜んだ。
その後、蛇を殺した蟹の
罪を救うために、この土地
を掘つて蛇の屍体を埋め、
その上に寺を建てて、仏像
をつくりたり経巻を書き写
したりして供養をした。そ
の寺の名を蟹満多寺とい
う。その寺は今でもあり
今の人はその名を庇つて
紙幡寺々といつているとい
う。これは事の由来を知ら
ないからであらう。
思えばこの娘はただの人
とは思われない。観音の靈
驗は実に不可思議であると
して世人が尊んでいるとい
います。
(完)

小田原史談会理事